

平成25年度
博士課程教育リーディングプログラム プログラムの概要 [採択時公表]

機関名	京都大学	機関番号	14301
1. 全体責任者 (学長)	<small>※ 共同申請のプログラムの場合は、全ての構成大学の学長について記入し、申請を取りまとめる大学(連合大学院によるもの場合は基幹大学)の学長名に下線を引いてください。</small> <small>(ふりがな)</small> 氏名・職名 (まつもと ひろし) 松本 紘 (京都大学総長)		
2. プログラム責任者	<small>(ふりがな)</small> (あわじ としゆき) 氏名・職名 淡路 敏之 (京都大学理事・副学長)		
3. プログラム コーディネーター	<small>(ふりがな)</small> (まつざわ てつろう) 氏名・職名 松沢 哲郎 (京都大学霊長類研究所・教授)		
4. 申請類型	U <オンリーワン型>		
5.	プログラム名称	霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院	
	英語名称	Leading Graduate Program for Primatology and Wildlife Science	
	副題	人間とそれ以外の動物を対象とした地球社会の調和ある共存	
6. 授与する博士 学位分野・名称	博士(理学)ただし霊長類学・ワイルドライフサイエンスプログラム修了		
7. 主要分科	(①) (②) (③) ※ 複合領域型は太枠に主要な分科を記入		
	基礎生物学、生物科学、人間情報学、人類学、環境創成学、動物生命科学、心理学、子ども学、科学教育・教育工学、地域研究、文化人類学、文化財科学・博物館学、政治学		
8. 主要細目	(① 進化生物学) (② 生態・環境) (③ 認知科学) ※ オンリーワン型は太枠に主要な細目を記入		
	生物物理学、動物生理・行動、植物分子・生理科学、自然人類学、自然共生システム、獣医学、統合動物科学、実験心理学、子ども学、科学教育、地域研究、文化人類学・民俗学、文化財科学・博物館学、政治学、国際関係論		
9. 専攻等名 (主たる専攻等がある場合は下線を引いてください。)	<u>理学研究科生物科学専攻</u> 、霊長類研究所、野生動物研究センター		
10. 連合大学院又は共同教育課程による申請(構想による申請も含む)の場合、その別 ※ 該当する場合には○を記入			
連合大学院		共同教育課程	
11. 連携先機関名(他の大学等と連携した取組の場合の機関名、研究科専攻等名)			

(機関名:京都大学 申請類型:オンリーワン型 プログラム名称:霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院)

15. プログラム担当者一覧

氏名	フリガナ	年齢	所属(研究科・専攻等)・職名	現在の専門学位	役割分担 (平成26年度における役割)
(プログラム責任者) 淡路 敏之	アワジ トシユキ	65	理事(教育担当)、副学長	海洋物理学 博士(理学)	プログラム責任者として学位プログラムの全体運営を遂行し、責任を持つ。
(プログラムコーディネーター) 松沢 哲郎	マツザワ テツロウ	62	霊長類研究所・教授 理学研究科・生物科学専攻・教授(協力講座)	比較認知科学 博士(理学)	プログラムコーディネーターとして学位プログラムの全体運営が円滑に進むよう、諸般の調整にあたる。
平井 啓久	ヒライ ヒロヒサ	60	霊長類研究所・所長・教授 理学研究科・生物科学専攻・教授(協力講座)	分子細胞遺伝学 医学博士	霊長類学プログラム推進リーダーとして博士教育カリキュラムに必要な諸般の調整に当たる。
幸島 司郎	コウシマ シロウ	57	野生動物研究センター・教授 理学研究科・生物科学専攻・教授(協力講座)	生態学・動物行動学 博士(理学)	ワイルドライフサイエンス・リーダーとして博士教育カリキュラムに必要な諸般の調整に当たる。
山極 壽一	ヤマギワ ジュイチ	61	理学研究科・生物科学専攻・教授	人類進化論 博士(理学)	保全生物学リーダーとしての役割とともに、自然人類学、霊長類学で人と野生動物の両方の見地から保全研究や政策について国際的な視野から教育にあたる。
阿形 清和	アガタ キヨカズ	58	理学研究科・生物科学専攻・教授	発生生物学 博士(理学)	本プログラムにおける教養科目リーダーとしての調整の役割とともに、ゲノムレベルでの生物多様性教育・実習を担当する。
中川 尚史	ナカガワ ナオミ	52	理学研究科・生物科学専攻・准教授	霊長類学 博士(理学)	プログラムの分担者のひとりとして、生態学、保全生物学分野の教育を担当する。
井上 英治	イノウエ エイジ	34	理学研究科・生物科学専攻・助教	分子生態学・霊長類学 博士(理学)	保全生物学に関するラボワークに関する教育に従事する。
古市 剛史	フルイチ タケシ	55	霊長類研究所・教授 理学研究科・生物科学専攻・教授(協力講座)	霊長類学、自然人類学 理学博士	プログラム担当者として、主として野外調査に基づく教育及び研究指導を行う。
湯本 貴和	ユモト タカカズ	54	霊長類研究所・教授 理学研究科・生物科学専攻・教授(協力講座)	霊長類学・生態学 博士(理学)	霊長類と森林に関する生態学的な観点から研究教育を行うとともに、生態系における動物の役割や人間社会との関係の探求からワイルドライフサイエンスの構築に寄与する。
岡本 宗裕	オカモト ムネヒロ	53	霊長類研究所・教授 理学研究科・生物科学専攻・教授(協力講座)	獣医学 博士(獣医学)	プログラム担当者として、獣医学特に野生動物医学に関する教育を担当する。
Huffman, Michael Alan	ハフマン マイケル アラン	54	霊長類研究所・准教授 理学研究科・生物科学専攻・准教授(協力講座)	行動生態学 博士(理学)	プログラム担当者として、霊長類の行動生態学に係る教育及び研究指導を行う。
Bercovitch, Fred Bruce	ベルコビッチ フレッド ブルース	61	霊長類研究所・特定教授(G30)	比較野生動物生物学 Ph. D.	国際的な研究機関で勤務した経験をもとに、国際社会で活躍できる研究者の育成を推進する。ネイティブとして英語での研究・教育を支援する。
Hill, David Anthony	ヒル デイビット アンソニー	55	霊長類研究所・客員教授	社会生態学 Ph. D.	国際社会で活躍できる研究者の育成を推進する。また過去に数度渡日した経験により、日本人学生を考慮した学位プログラムの国際化に貢献し、またネイティブの英語を活かす。
平田 聡	ヒラタ サトシ	39	霊長類研究所・特定准教授(特別教育研究)	比較認知科学 博士(理学)	分担者としての役割として、熊本サンチュアリでの比較認知科学の実習を担当する。
足立 幾磨	アダチ イクマ	34	霊長類研究所・助教 理学研究科・生物科学専攻・助教(協力講座)	比較認知科学 博士(文学)	国際共同先端研究センター所属教員として本プログラムとりまごめ役をするとともに、霊長類研究所での比較認知科学の実習を担当する。
橋本 千絵	ハシモト チエ	48	霊長類研究所・助教 理学研究科・生物科学専攻・助教(協力講座)	霊長類学、自然人類学 理学博士	プログラム担当者として、主として野外調査にもとづく教育及び研究指導を行う。
江木 直子	エギ ナオコ	42	霊長類研究所・助教 理学研究科・生物科学専攻・助教(協力講座)	古生物学、比較形態学 Ph. D (医学)	プログラム担当者として、霊長類学、古生物学の講義と実習を担当する。
宮部 貴子	ミヤベ タカコ	36	霊長類研究所・助教 理学研究科・生物科学専攻・助教(協力講座)	獣医学、麻酔学 Ph. D (獣医学)	プログラム担当者として、獣医学、麻酔学に関する教育を担当する。
林 美里	ハヤシ ミサト	33	霊長類研究所・助教 理学研究科・生物科学専攻・助教(協力講座)	比較認知発達 博士(理学)	本プログラムの担当者として、霊長類学、比較認知科学の講義と実習を担当する。
MacIntosh, Andrew James Jonathan	マッキントッシュ アンドリュー ジェームズ ジョナサン	35	霊長類研究所・特定助教(G30)	行動生態学 博士(理学)	本プログラムの担当者として、外国人でありながら京都大学で博士学位を取得した経験をもとに、日本人学生を考慮した学位プログラムの国際化に貢献する。
伊谷 原一	イダニ ゲンイチ	55	野生動物研究センター・教授 理学研究科・生物科学専攻・教授(協力講座)	人類学・動物園科学 博士(理学)	本プログラムの副コーディネーターとして調整の役にあたるとともに、ワイルドライフサイエンスの専門家として、国際的な発信力をもつ実践者の育成をおこなう。
村山 美穂	ムラヤマ ミホ	48	野生動物研究センター・教授 理学研究科・生物科学専攻・教授(協力講座)	動物遺伝学 博士(理学)	本プログラムの分担者として、フィールドとラボをつなぐゲノム細胞研究・教育つうじて、野生動物の保全の実践において国際貢献できる人材を育成する。
中村 美知夫	ナカムラ ミチオ	41	野生動物研究センター・准教授 理学研究科・生物科学専攻・准教授(協力講座)	人類学・霊長類学 博士(理学)	本プログラムの分担者として、アフリカで絶滅危惧種の長期研究やその保全をおこなってきた経験を活かして、フィールドワークを主体的に実施できる人材の育成をおこなう。
杉浦 秀樹	スギウラ ヒデキ	45	野生動物研究センター・准教授 理学研究科・生物科学専攻・准教授(協力講座)	動物行動学・生態学 博士(理学)	本プログラムの分担者として、保全生物学の立場から、野外でのフィールドワークの指導を行う。

(機関名:京都大学 申請類型:オンリーワン型 プログラム名称:霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院)

15. プログラム担当者一覧(続き)

氏名	フリガナ	年齢	所属(研究科・専攻等)・職名	現在の専門 学位	役割分担 (平成25年度における役割)
山越 言	ヤマコシ ゲン	43	アジア・アフリカ地域研究研究科・アフリカ地域研究専攻・准教授	地域研究・文化人類学 博士(理学)	本プログラムの分担者として、ギニア共和国における長期的ワイルドライフサイエンス人材育成活動の実施にあたる。
清水 展	シミズ ヒロム	61	東南アジア研究所・所長・教授 アジア・アフリカ地域研究研究科・東南アジア地域研究専攻・教授(協力講座)	文化人類学、東南アジア研究 社会学博士	本プログラムの分担者として、東南アジアにおける、文化人類学フィールドワークの指導にあたる。
松林 公蔵	マツバヤシ コウゾウ	62	東南アジア研究所・教授	フィールド医学、老年医学、神経内科学 博士(医学)	本プログラムの分担者として、フィールド(プータン・ニューギニア)における高齢者ヘルスケア・デザインの構築を担当する。
吉川 左紀子	ヨシカワ サキコ	59	こころの未来研究センター・教授	認知心理学・認知科学 博士(教育学)	本プログラムで育成される若手の指導者に必要不可欠な、心理学領域の教養知識にかかる情報提供や教育活動を担う。
明和 政子	ミヨウワ マサコ	42	教育学研究科・教育学専攻・准教授	発達科学・比較認知科学 博士(教育学)	本学位プログラムにおける人間科学における基礎教育の提供とフィールドでの応用実践。
坂本 龍太	サカモト リョウタ	36	白眉センター・特定助教	フィールド医学 博士(医学)	本プログラムの分担者として、プータン王国を対象とした指導者育成プログラムを担当する。
毛利 衛	モウリ マモル	65	日本科学未来館・館長	科学コミュニケーション 博士(理学)	本プログラムの分担者として、科学教育(科学的な論理思考と科学コミュニケーション能力を持つ人材の育成)を担当する。
西田 睦	ニシダ ムツミ	66	琉球大学・理事(研究・企画戦略担当)、副学長	水域生物学・進化生物学 農学博士	本プログラム担当者として、主として水圏生物学、進化生物学・保全遺伝学の分野の面から、本プログラムの推進に参画する。
田中 正之	タナカ マサユキ	44	京都市動物園・生き物学び研究センター長(野生動物研究センター・特任教授)	比較認知科学・動物園学 博士(理学)	本プログラム担当者として、野生動物保全における動物園の役割についての教育、および動物園を舞台にした実践者の育成を担当する。
岡安 直比	オカヤス ナオビ	52	WWFジャパン自然保護室・ネットワーク優先地域/象徴種チーム・チーフコーディネーター	保全生物学、霊長類学を基礎とした森林生物多様性保全 博士(理学)	国際NGO職員としての経験を生かし、霊長類学の基礎を踏まえた発展途上国における希少種保護の実践を、自然保護と地域社会の持続可能な発展の双方から捉え、指導する。
星川 茂一	ホシカワ シゲカズ	64	前 京都市副市長	地方行財政学 学士(法学)	本プログラム担当者として、自治体行政に携わった者の立場から当学位プログラムの内容充実に貢献する。
堀江 正彦	ホリエ マサヒコ	66	明治大学研究・知財戦略機構・特任教授、前駐マレーシア特命全權大使・地球環境問題担当大使	地球環境問題 修士(経済学)	本プログラム担当者として、外務省での大使としての経験を活かし、学問を実践に活かす人材の育成を支援する。

(機関名: 京都大学 申請類型: オンリーワン型 プログラム名称: 霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院)

リーダーを養成するプログラムの概要、特色、優位性

(広く産学官にわたりグローバルに活躍するリーダー養成の観点から、本プログラムの概要、特色、優位性を記入してください。)

【概要】 霊長類学は日本発の、そして日本が世界を牽引する稀有な学問であり、近年、霊長類学を基盤にし、大型の絶滅危惧種を対象にした「ワイルドライフサイエンス」という新興の学問分野が確立されつつある。そこで必要とされているのは、フィールドワークを基盤として、人間のこころ・からだ・くらし・ゲノムを包括的に理解しつつ、「地球社会の調和ある共存」を目指す実践活動である。学問としては最先端を担っているが、欧米にあって日本に明確に欠けているものが3つある。①生物保全の専門家として国連や国際機関・国際NGO等で働く若手人材、②博物館・動物園・水族館等におけるキュレーター、および、生息地で展開する博物館動物園としての「フィールドミュージアム」構想の具現者、③長い歳月をかけて一国を対象としたアウトリーチ活動を担う実践者、である。これら日本が抱える3つの欠陥を逆に伸びしろと考える。研究・教育・実践の新たな展開の場と捉え、学問と実践をつなぐグローバルリーダーの育成を目指す。本プログラムで修養を積んだ人材は、高度な専門的知識を有するとともに、現場でのニーズを素早く把握し、問題を解決する能力を有しており、産業界においても貴重な戦力として期待できる。

【特色および優位性】 本プログラムでは、霊長類学の蓄積を活かし、以下3点を重点施策に据え、ワイルドライフサイエンスの広い分野で博士学位を持ち国際性を身につけたグローバルリーダーを育成する。

1. 絶滅危惧種をシンボルとした生態系の保全を担う国際機関ならびに NGO 組織で職員や指導者として活躍できる人材の育成

日本は国際連合 (UN) の主要なドナー国でありながら、職員数は著しく少ない。これは専門性と、語学力・情報発信力、フィールドワークの現場経験をあわせもった人材が不足しているためだと考えられる。そこで、本プログラムを通じ、現場経験をもち博士学位を有するフィールドワーカーを育成し、国連を含む国際機関、国際的 NGO 等で中心となって働く人材を養成することが、国際社会の一員としての日本の急務と考える。幸い、霊長類学とワイルドライフサイエンスについて日本学術振興会の先端研究拠点事業等で日独米英仏伊の先進6か国連携体制を確立し、生息地の主要研究機関とも覚書を通じた連携体制を構築してきた。それらをもとに、研究者ではなく国際的実践者の人材育成を目指す。

2. 博物館・動物園・水族館・教育現場等において主事の役割を果たす指導者の育成

欧米ではリサーチフェローやキュレーター等の職が確立していて、博士学位をもった人材が、研究と教育を両立させつつ動物園・水族館等の運営等に深く関わっている一方、日本では人間とそれ以外の動物との調和ある共存について学問と実践を統合する人材が乏しい。本プログラムにより、絶滅危惧種保護のための国際連携にも貢献できるような国際的情報発信とコミュニケーションを園館で担う主事の役割を果たす人材を育成する。本学はすでに京都市動物園をはじめ園館との連携締結を進めており、本プログラムで狙う人材教育の基盤はできつつある。法令によって定められた博物館の学芸員資格だけではなく、真に科学を学んだものが博物館での活動を通じて、科学的研究成果を一般に伝えることができるようにしたい。その先に、国内外の生息地そのもので展開する新しい博物館動物園のかたちである「フィールドミュージアム」の実現を目指す。

3. 一国を対象としたアウトリーチ活動を担えるオールラウンドな指導者の育成

京都大学は、1957年にはじまったブータンとの交流に見られるように、全学を挙げて1国を対象としたアウトリーチ活動をおこなってきた。こうした活動を支えるのは、総合大学ならではの文化・教育・宗教・防災・生物・農業・環境等に関する広範な協力体制である。京都大学はこの点においても秀でている。本プログラムでは、ゲノム科学から行動学や生態学までフィールドワークを基本とした手法で、アマゾン(ブラジル)等生物多様性のホットスポットにおける保全活動を通じて、一国まるごとを対象としたアウトリーチ活動を担うオールラウンドな指導者の育成を目指す。活動実施予定の国や地域との連携体制は既に整っている。

上記の施策のため、以下の3点を軸に教育をおこなう。

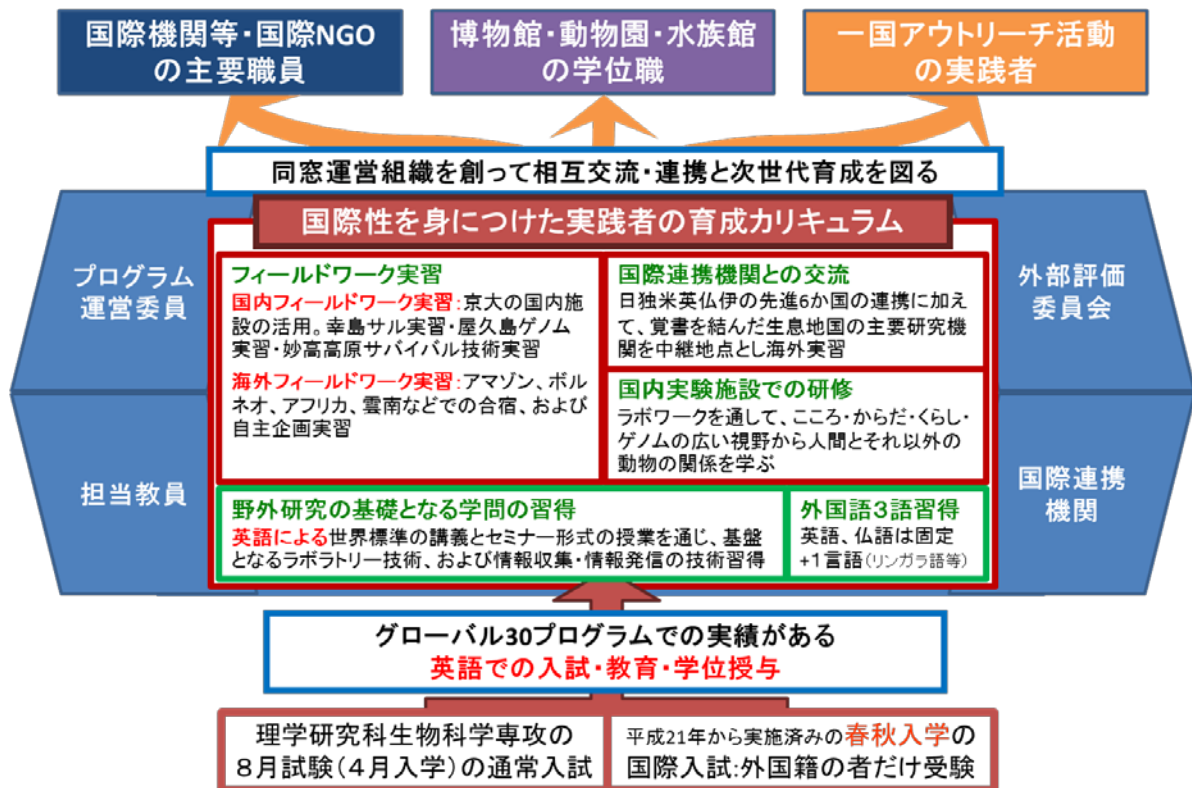
- ① **フィールドワーク実習**: 京大が保有する国内の野外実習拠点を活用する。天然記念物の幸島での野生ニホンザルの生態観察、世界自然遺産の屋久島でのヤクザルとシカの共存する森でのゲノム実習、妙高高原京大ヒュッテを拠点とした野外生活・観察実習に、自主企画運営の短期野外研究を加えた4つの野外実習を1年次の必修とする。2年次以降は、国際連携拠点でフィールドワーク実習をおこなう。
- ② **国際連携機関との交流**: 各年次で義務付ける。平成16年度の先端研究拠点事業に始まって10年続く日独米英仏伊の先進6か国の連携に加えて、生息地国の主要研究機関との覚書も整っている。いずれかの場所を中継基地として、海外実習を実践する。
- ③ **国内実験施設での実習**: 京大が保有する研究施設: 霊長類研究所、野生動物研究センター、リサーチリソースステーション RRS、幸島観察所、熊本サンクチュアリや、学外連携施設: 京都市動物園、京都水族館、名古屋市東山動物園、日本モンキーセンター等を活用する。ラボワークを通して、こころ・からだ・くらし・ゲノムの広い視野から人間とそれ以外の動物の関係を学ぶ。

入学試験は、原則として英語でおこない、春秋入学も認める。すでに平成21年度に霊長類研究所国際共同先端研究センターを立ち上げ、グローバル30プログラムに沿って外国人留学生を対象に独立の大学院入試・教育・学位授与をおこなってきた。そのノウハウと蓄積を日本人学生にも活かして、入り口から出口まで一貫した展望で国際性をもった運営をする。

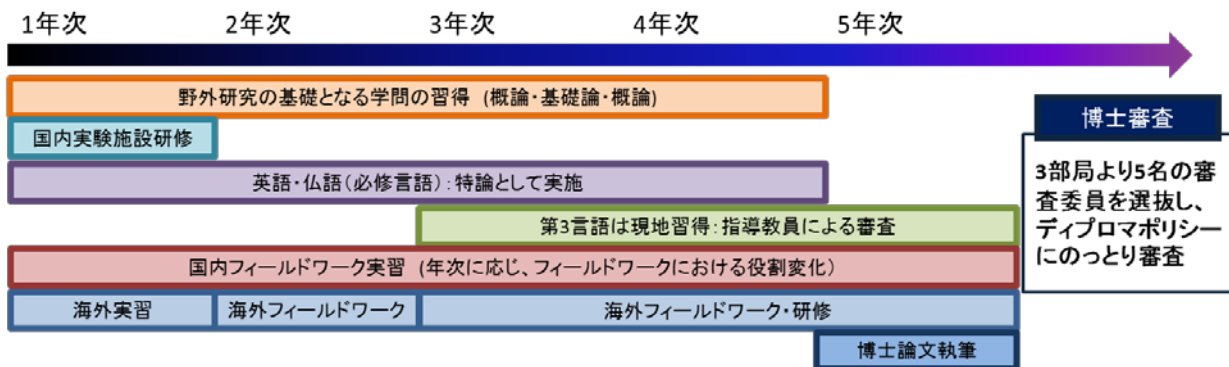
学位プログラムの概念図

(優秀な学生を俯瞰力と独創力を備え広く産学官にわたりグローバルに活躍するリーダーとして養成する観点から、コースワークや研究室ローテーションなどから研究指導、学位授与に至るプロセスや、産学官等の連携による実践性、国際性ある研究訓練やキャリアパス支援、国内外の優秀な学生を獲得し切磋琢磨させる仕組み、質保証システムなどについて、学位プログラムの全体像と特徴が分かるようにイメージ図を書いてください。なお、共同実施機関及び連携先機関があるものについては、それらも含めて記入してください。)

【霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院】



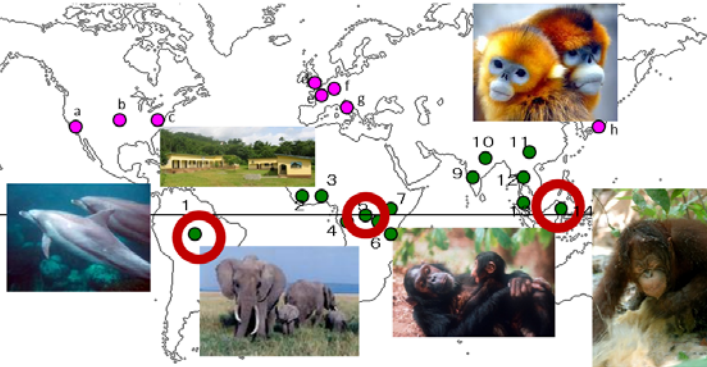
カリキュラムの年次ごとのフロー



本プログラムの基盤となる海外フィールドワーク拠点と連携協定の締結先

アマゾン・コンゴ・ボルネオの世界3大熱帯林(大きな赤丸)に研究教育拠点をもつ

- 1: ブラジル・国立アマゾン研究所、2: ギニア・ボツウ環境研究所、3: ガーナ・国立大学、4: ガボン・ムカラバ国立公園、5: コンゴ・ルオー保護区、6: コンゴ・カフジビエ国立公園、7: ウガンダ・カリンズ森林、8: タンザニア・マハレ・ウガラ国立公園、9: インド科学大学、10: ブータン・ブータン王立大学、11: 中国・雲南省昆明動物研究所、12: タイ・チラロンコン大学、13: マレーシア科学大学、14: マレーシアサバ大学
- a: カリフォルニア大学サンディエゴ校、b: シカゴ・リンカーンパーク動物園、c: ハーバード大学、d: ケンブリッジ大学、e: エコルノルマルシュペリエール、f: マックスプランク進化人類学研究所、g: イタリア認知科学工学研究所、h: 京都大学ヘッドクォーター



機 関 名	京都大学
プログラム名称	霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院
<p>[採択理由]</p> <p>これまでの京都大学の経験と蓄積を活かし、フィールドワークの専門知識と技術を身につけて世界で活躍する人材を養成しようとする計画は高く評価される。</p> <p>国連を含む国際機関・国際的 NGO での生物保全の専門家、博物館・動物園・水族館で活躍するキュレーター（博士学芸員）、一国丸ごとを対象とするアウトリーチ活動を担う実践者という3点を重点施策とした、ワイルドライフサイエンスの広い分野で博士学位を持ち、国際性を身につけたグローバルリーダーの育成を目指しており、とくに国連などの国際機関で活躍できる人材の養成を目指している点については、これまでの日本が強みを持たなかった部分としてその成果が注目される。</p> <p>また、京都大学理学研究科、京都大学霊長類研究所など、これまでにフィールドワークの実績を持つ組織がよく連携している。</p>	